

電子顕微鏡による細胞組織図譜 (Ⅱ)

総編集 山田 英智 内蘭 耕二 渡辺陽之輔

消化器・呼吸器

編集 水平敏知 倉橋和啓 平井五郎
柴崎 晋 山田英智 市川 厚
山元寅男

信州大学医学部解剖学教授 尾持 昌次

電子顕微鏡による細胞組織学図譜(全6巻)のうちの最終刊になる第2巻についての書評を求められた。この図譜の「発刊のことば」によると、この図譜は単に電子顕微鏡を使って研究にたずさわる人々に対する標準的のテキストの役目をするだけでなく、臨床医学を含めて他の分野の研究者にも基礎的な知識として活用されることが期待されているのであるから、私のように医科の大学生に対する組織学の教育については一応の専門家であっても、最近の電子顕微鏡による研究には専門家ともいえない者がアウトサイダーのような立場でこの本を批判することも、あながち無意義ではないと考えてお引受けしたわけである。

さてそのような立場で最終頁まで入念にテキストを読み、図を観察したが、なかなか興味が深く感銘を覚えた。当然知っていなければならぬことかも知れないが、私にとっては新しい知識として参考になった簡

所がかなりある。それだけに興味も深かったのである。

また、私にとってありがたいと感じたのは、かなり専門的な研究上の用語の説明があったり、最近の学説についての形態学的、生理学的の解説まで付加されていたことであってこれによってこの方面の最新の知識をまとめて簡潔に知ることができたことである。これこそその方面の真の意味での専門家の分担執筆、編集にたる本書のみが持ち得る強味であり特長であるといつてよいと信じ、発刊のことばにある通り、いわゆる電顕専門家だけではなく広く電顕を研究の一つの手段に用いられる方々にも心から本書を推せんする次第である。

しかしどの書籍にもあるごとく、本書にも搜してみれば不備の点がないこともない。次の機会に訂正を望みながらこれらをあえて記すならば次の通りである。

1) テキストにかなり基礎的の説

明から高度の事柄まで記してあるのは誠に結構である。しかし分担執筆者の中には担当部分のこの種の記述が余りに簡略に過ぎ、図の説明までも簡単過ぎる人もあるようである。是非一般的の基準にまで詳しくして欲しい。

2) 用語の統一には力を入れられているように思われたがなお結合組織と結合組織が混在したり、小食胞とpinocytotic vesicleとの併用と単記、またパイノサイトーシスと片かな書きがあるなどの不統一が僅少ながら認められた。

3) ごく限られた部分だけではあったが図の説明の文章の中に書き加えられた参照すべき図の番号が間違っているものがある。

4) 図の中の符号を指す位置が多少ずれているものがある。経験者にはわかるが初心の研究者には誤解させるおそれがある。また図の中の符号に相当する説明が図の説明文の中にみあたらないことがある。前掲の図にある符号でも繰り返して説明を加えた方が読者にとっては親切であろう。

5) いわゆる教科書的の基準的な図がいくらか省略されたかの感じがしないわけでもない。このようなものを挿入することも蛇足ではないのではなかろうか。

A 4 頁305 図5 写真172
¥12,000 ㊦250 医学書院刊